

大阪大谷大学

令和五年度 入学試験問題（公募制推薦・後期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は、全部で十二ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ（設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

いかげんにつくられていると、それこそ I かからない味になってしまうが、ていねいに、細心にこしらえてみると「地豆どうふ」は、これを仕上げた人が胸を張って誇れる料理の一つだ、とわたしは思っている。

沖縄の人たちは、落花生を「地豆」という。地面の下で実が育つから、「地豆」と呼ぶことにしたのであるが、沖縄風にいうと「じいまあみ」だ。コドモのころ、ある家へ遊びにいき、菜園で「地豆」の花が咲いているのを見たことがある。ほんの少しだけけれど、「地豆」の収穫があるそうで、だから沖縄でも「地豆」は栽培できたのであるが、農業としてはどうだったのだろう。^①

その「地豆」を材料とする「豆腐」が、いつのころから琉球料理の一つになったのか。これも中国に学んだものにちがいないが、とにかく古い時代の沖縄に、「地豆」が豊富にあったとは考えられないので、数ある料理の中で「地豆どうふ」は、なかなか出合えない美味となっていたにちがいない。つくるのがめんどうなので、家庭料理としてはムリだ。めったにない祝いの膳部をにぎやかにするため、「地豆どうふ」をコンダテ^aに入れるということになって、骨身を惜しまぬ料理担当者が、II 場合でないと、その美味を口にすることはできなかったと思う。

——というわけで、昔は材料が少なかったことなどのために、「地豆どうふ」は珍味の一つになっていただろうし、文明開花してどんな品でも船で運べる時代になると、骨身を惜しむ人が増えて、なかなか出合えない料理になったのである。手間がかかるといっても、商売となれば別だ。専門の料理店では必要に応じてつくったりする。青年に成長してから、料理店の会席膳に現れる「地豆どうふ」によって、わたしはこの料理の味を知ったのであるが、まだ味覚が若かったせいで、あまりおいしさと感じなかった。肉を何より好む年ごろのわたしには、ほのかな風味に値打ちのある「地豆どうふ」の優雅さが理解できなかったのである。

さて、「地豆どうふ」は、日本料理の「胡麻どうふ」と、片や「地豆」もう片方が胡麻を使うという違いはあるにしても同種の料理だ^bとみていいだろう。

カラから取りだしたナマの「地豆」を水につけておき、赤くて薄い皮をはがしてから水を加え、すり鉢にするのだが、ザラザラのな

い、完全な白い液体となるまで、かなりの労働が必要だ。つくる人は、根気と力をすりこ木に託して、くたびれはてる。料理に熱心なのは婦人に多く、食べれば軽くノドを通ってしまう「地豆豆腐」が、きわめてなめらかな感触を舌に与えるようにするため、すつて、「地豆」が水に溶けた状態になるまで手を休めなかった。料理するものつとめだと思っていればこそその苦行だったのである。

気温三十度を超す夏の暑さ。火のある厨房では、さらに気温が上がっていて、だんだん固まっていく真っ白い液体を掻きまわしつづける人のからだは、汗がとまらない。その汗を拭くことさえできないで、IIIがつづく。火にかけて、はじめのうちは、掻きまわすのも容易であるが、固まるにつれて、掻きまわす手に対する抵抗は強くなるばかりだ。疲れを感じるころになって、ますます力を入れなければならなくなるのだから、体力の勝負になる。鍋の中にある純白のドロドロにカフソクなく火が通ったのを見きわめて、長方形の型に流しこみ、冷やし固めて、できあがりだ。できあがったら、包丁を入れて四角に切り分ける。

日本料理店で「胡麻豆腐」を食べさせられることがよくあり、「地豆豆腐」と同じつくりかたであろうと思うので、板前さんの苦勞を察したりするのだが、時には口に入れたとたんに顔をしかめざるをえないこともあった。二つの料理をくらべてみると、同種とはいえ、性格はまるで違う。「胡麻豆腐」は黒ずんだ色で、味と香りが、舌にからみついでくる。そこに胡麻のしつっこさを感じるのだが、「地豆豆腐」は、不思議なほどあぶらっこくない。さらに色の白さときたら、料理されたものの中で、かくも純白な品はないはずだ、といたいくらいであり、箸で切ろうとすれば、「胡麻豆腐」よりネッチリとして餅みたいだ。よく仕上げられた「地豆豆腐」ほどネッチリの度合いが強く、これを薄味のタレにつけて食べると、なめらかな舌ざわりは、ほかに類がないのである。

味について語るなら、なめらかな舌ざわりとともに、ハナへ抜ける「地豆」の香りが、まさに値打ちもの。この香りは、ナマの地豆にこもるさわやかさが特徴で、「地豆豆腐」をおいしいと感じるのは、なめらかさと香りが舌を通りすぎていく時だ。真っ白くて軽い風味をつくりだすために、一人の人間がくたびれはてるまではたらくというのはいかにIVようだが、優雅な料理は、やはりはげしい労働から生まれるといえるのではないか。

若いころから料理が上手で、「地豆豆腐」を得意とした婦人を、わたしは知っている。軽やかな風味が「地豆豆腐」の値打ちだ、とわたしがさとしたのも、実をいうと、彼女の手製を味わった時だった。若いころは軽妙な味を楽しむことができなかったのに、四十

歳を越すと、味覚が成熟するのか、ようやく優雅を味わえるようになっていたらしい。

その婦人は五十歳を過ぎてから、体力の衰えを感じ、「地豆」をすったあとには肩がこって、とても苦しくなるといながらも、決していかげんな仕事をしなかったのである。健康に生まれついた不幸は、身を惜しまずに、体力を使ってしまうということにあった。ある時、わたしの友人が、せつせとすりこ木を使っている彼女の X そうな様子を見て

「オバさん、今はミキサーという便利な台所道具が現れているんですよ。この道具は、果物をジュースにするためによく使われていますが、大豆でも地豆でも、水にふやかしておけば、^dゾウサなくドロドロにしていますよ。それを使っごらんさい」といって、^④ミキサーをプレゼントしたのである。

婦人は使うのをイヤがった。自分はなめらかな「地豆豆腐」をつくるために、自分のからだを励ましている。電気仕掛けで動く道具を使って、カンタンにすりつぶした「地豆」が、おいしい豆腐になるはずはない、というのが彼女の考えだった。たしかに、たゆまぬ努力の結晶として、おいしい「地豆豆腐」をつくってきたことに誇りがあったのである。

だが、わたしの友人は、あなたを長生きさせるためだ。ぜひ試してごらんよ。うまい豆腐ができなくても、もともとではありませんか。失敗なら、今までやってきたとおりのことをすればいいでしょうと、ミキサーの動かしかたを教え、ムリに試させたのである。信じかねている婦人は、しぶしぶいわれるとおりにした。

すると、婦人は、自分の誇りにかけて、電気器具が失敗することを予期し、かつ心ひそかに望んでいたらしいのに、ミキサーでつぶした「地豆」が、手ですったのと変わりのない完全な豆腐に仕上がったのである。どうしたことか、と信じかねていたが、二度、三度と同じことをやってみると、信じるほかはない。その度に、できあがったのを食べてみて、彼女は考えこんだ。

「若いうちから難儀して、自分の腕をコキ使ったのが V よ。今までつづけた苦勞が、アッサリと電気仕掛けに追い越されるなんて、こんなことがあっていいのかね。いったいわたしの難儀は何だったんだろう」

と婦人はジュッカイしている。

(古波蔵保好『料理沖繩物語』による)

問一 二重傍線部 a ㄥ e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 I ㄥ V に入る最も適当な語句を、次のアㄥエの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

I	ア 猫も杓子も	イ 後にも先にも	ウ 手間も暇も	エ 箸にも棒にも
II	ア もろ肌を脱ぐ	イ 肩肘を張る	ウ かぶりを振る	エ 目の色を変える
III	ア 入魂の技	イ 無言の行	ウ 窮余の策	エ 自明の理
IV	ア 風下におけない	イ 決まりがわるい	ウ 了見がせまい	エ 割にあわない
V	ア 初々しい	イ しおらしい	ウ 口惜しい	エ いかがわしい

問三 傍線部①「農業としてはどうだったのだろう」とあるが、どのような意味か。作者の考えとして最も適当なものを、次のアㄥエの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 古い時代の沖縄では地豆の生産が農業として確立しておらず、中国からの輸入に頼っていた。
- イ 現在の沖縄のように十分に地豆を収穫できる技術を、過去の沖縄の農業は持っていなかった。
- ウ 子供の頃に遊びにいった家では、農業として成り立つほどの地豆を栽培しようとしなかった。
- エ 地豆どうふが琉球料理となった後も、農業となるほど十分な量の地豆は作られていなかった。

問四 傍線部②「同種の料理だとみていいだろう」とあるが、「胡麻どうふ」と「地豆どうふ」は、何が、どのように異なるのか。両者を対比しながら、本文中の語句を用いて、八十字以内で説明せよ。

問五 傍線部③「軽妙な味」とあるが、著者は、ほのかな風味の「地豆どうふ」の価値が、どこにあると述べているか。本文中の語句を用いて、三十字以内で述べよ。

問六 空欄 に入る最も適当な語を、本文中より漢字二文字で抜き出して答えよ。

問七 傍線部④「ミキサーをプレゼントした」とあるが、なぜそのようなことをしたのか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 身を惜しまず苦しい思いをして豆腐を作り続ける婦人に、楽をして欲しかったから。
- イ 電気器具においしい豆腐は作れないと信じる婦人に、考えを変えて欲しかったから。
- ウ 身を惜しまず嬉々として豆腐を作る婦人に、ぜひとも長生きをして欲しかったから。
- エ 電気器具にもおいしい豆腐は作れることを、苦しむ婦人に気付いて欲しかったから。

問八 本文の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 地豆の収穫は少ないものの、地豆豆腐は一般家庭でも作られることがあった。
- イ 船で中国から地豆を輸入できるようになると、地豆豆腐を作る人は激減した。
- ウ 大変な労力が必要であったからこそ、地豆豆腐という優雅な料理が生まれた。
- エ 優雅な料理を伝承するため、今後は体力ではなく電気器具の使用が求められる。

㉓ 次の文章を読んで、後の間に答えよ（設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

日本語はむずかしい、特殊な言語だ、とはよく耳にするところである。英語もフランス語もドイツ語もよく似ているのに、日本語だけちがうと感じるのだろうか、英・仏・独語は同じ源から分かれ出た兄弟の言語だから、似ていて当然である。広い世界に数千あるといわれる言語の中に置いてみると、日本語の音韻や文法の構造は、人類の言語として決して特殊なものでも、学びにくいものでもないということが、最近の言語ルイケイの研究で次第にわかってきている。

しかし、日本語の文字・表記の複雑さは世界に冠たるものがあり、これは日本語を母語とするわれわれも日々実感しているところだ。具体的に、特にケンチヨな特徴をあげてみると、

- ・ 主なものだけでも、漢字・ひらがな・カタカナと三種の文字体系を使い分ける
 - ・ 漢字は音読みと訓読み、さらに音読みには呉音・漢音・唐音と、一文字が多数の読み方をもつ
- という点がまず目に付く。

お隣の韓国のように、漢字・ハングルと二種類の文字体系を混用することはあっても、三種類を混用するのはめずらしい。また、漢字文化圏の中でも、漢字が「訓読み」^①をもっているのは日本語だけなので、同じく漢字は用いている中国や韓国の人たちは漢字の **A** には悩まされていないのである。

これだけでも十分特殊だといえるが、日本語の書字方向は、現存する世界の表記体系の中で、極めて特殊な存在なのである。世界の言語の書字方向のうち、主要なものは、

- ① 右横書き（下へ行移り）
- ② 左横書き（下へ行移り）
- ③ （下への）縦書き・左へ行移り
- ④ （下への）縦書き・右へ行移り

の四種で、アラビア文字やヘブライ文字などは①の方式、モンゴル文字などは④の方式である。

書字方向がまだ不安定であった古代文字では、複数の書字方向が可能であった。たとえば、古代エジプトのヒエログリフでは①④すべての方式が可能であったし、中国の漢字も甲骨文字段階では③の方式のほか④の方式も可能だった。

しかし、確立した書字方向をもつ現存の表記体系でこの四種すべてが可能なのは、日本語をおいてない。今は廃れた①や④はのぞいても、②と③の両方式が可能だけで十分めずらしいのである。

ただ、日本語では、いわゆる「牛耕式」はおこなわれたことがない（一般的な書字方向にあえて B を引いたダダ的な試みとしてなら、大正時代の前衛詩の中で局所的におこなわれたことはある）。

牛耕式とは、牛が畑を鋤き返してゆくときに、一行目が左から右へ進むなら、二行目は（飛んで左へ戻るのではなく）右から左へと戻り、三行目はまた折り返して左から右へと進むもので、そのたびに文字の向きも変わる。古く小アジアのヒッタイト語やギリシア語、ラテン語でおこなわれたことで知られている。

縦書きで牛耕式をおこなうと、重力のもとで暮らしているわれわれにとっては テイコウ感 の大きい「上↑下」という方向があらわれるし、行ごとに文字の上下を逆転させて方向を表示するには、漢字の字体は複雑すぎるためとも考えられるが、一番の理由は、日本語の書字方向が「行」を早くから基本単位としてもっていたためだろう。

音声による言語は、時間の順に展開してゆく一本の線のような構造をしている。音声言語を写すことから始まった文字言語も、文字を一本の線のように並べてゆく。時間は無限だからいくらでもことばを続けてゆけるが、文字を一行にどこまでも連ねてゆくことは、無限の長さの紙テープのようなものを用意しなければできないものではない。インドネシア、スラウェシ島のプギス語の文字は昔はテープ状に貼り合わせた椰子の葉に最後まで一列に書いたものだそうだが、これはあくまで例外的で、文字を書く平面は有限なのが普通である。

有限な長さの平面に無限に文字を書き連ねてゆくためには、「行」や「ページ」というソウチが必要になる。「行」や「ページ」は、「平面的には不連続だが、文字列としては連続している」と見なす」という約束事の上に成り立つ文字表記独特の単位である。日本語で

も、巻物の本は「ページ」という単位をもっていないが、日本語が文字を用いるようになってから「行」という単位をもたなかった時代はない。

一方、牛耕式は、「螺旋状に書く」ことや、ブギス文字の「一列書き」などと並んで、「行」を必要としない書き方なのである。牛耕式は、一本の紐を折りタタんだようなものだから、**X**としてだけでなく**Y**上でも連続しているからである。

i、日本語の書字方向が多様性に富むとはいうものの、複数の方式が可能というだけなら、それほどめずらしいというわけでもない。④の方式のモンゴル文字は①の方式のウイグル文字から生まれたし、中国南部、雲南の少数民族彝族のロロ文字はもと④の方式だったのが、①の方式も生まれて現在ではどちらもおこなわれているという。

ii、これらと日本語とは事情は似て非なるものがある。

これらの文字が①から④、④から①へ変わった際には、実は文字の列全体が九〇度回転したのである。図1・1のようであったものが図1・2のように（あるいはその逆に）変わったのであって、図1・1がもとの形とするなら、それから生じた図1・2は真の縦書きではなく、横転した横書きにすぎない。その後、各字も九〇度横転した形で再登録・記憶されてのち、晴れて縦書きとなるわけである。

これまで「縦書き・横書き」ということばを何気なく使ってきたが、こうしたタイプの書き方まで問題にすると、もう少し厳密な用語が必要になってくる。図1・3のようなものは横書きでよいとして、図1・4のようなものは何と云うのだろうか。

普通、一つ一つの文字（単字）は、回転させてもちがう文字にはならない。文字をもたなかったネイティブ・アメリカンのために宣教師が創案したというエバンス音節文字という文字や、われわれの身近でいえば速記のような、人為的・意図的に作られた文字体系をのぞくと、同じ図形を向きによって異なる文字に当てるというのは、文字の構成原理にはなっていないのである。

iii、文字は回転させても同じ文字であることには変わりないのだが、しかし普通、単字には「この向きから見る」という一定の方向性がある。いわば正立像である。図1・3も図1・5も横書き、図1・4も図1・6も縦書きといえることからわかるように、横書き・縦書きは文

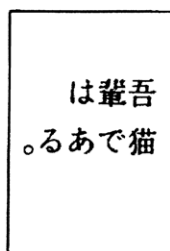


図1-1

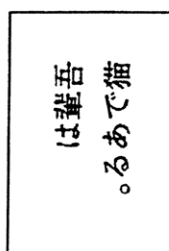


図1-2

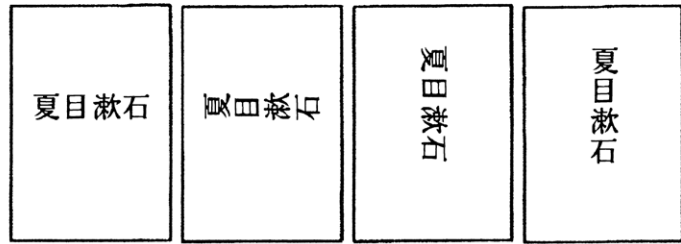


図1-3 図1-4 図1-5 図1-6

字と画面との関係ではなく、並びあう単字どうしの関係なのである。 iv、

横書き…単字の正立像に対して水平の方向に文字が並んでゆくもの

縦書き…単字の正立像に対して垂直の方向に文字が並んでゆくもの
のことである。

v、書字方向の単位は一つ一つの文字、単字であり、文字内部の構成や筆順とは次元が異なる。

たとえば、漢字はもともと縦書きする文字だが、単字内部は「偏」と「旁」の左右構成になっているものもあるわけである。

それでは、見慣れた図1・3や図1・6と、図1・4や図1・5とのちがいは何なのか。こちらこそが単字の正立像と、画面の標準的な向きとの関係なのである。図1・3や図1・6の場合は正立しているのに対し、図1・4や図1・5では横転しているといえる。

以上のような用語を導入すると、図1・3は「(正立)横書き」、図1・4は「横転縦書き」、図1・5は「横転横書き」、図1・6は「(正立)縦書き」と呼び分けることができるわけである。

日本語の場合は、文字ごとの正立像は回転せず、そのまま縦書きも横書きもできるのだから、縦書きと横書きの関係は口口文字の場合などとはまったく別物である。日本語の書字方向のあり方はやはり特異なものだといわざるをえないのである。

(屋名池誠『横書き登場—日本語表記の近代—』による)

ヒエログリフ…古代エジプトの象形文字。

ダダ…第一次世界大戦中におこり、一九二〇年代にかけて盛んとなった、国際的な美術・文芸運動。あらゆる社会的・芸術的伝統を否定し、反理性、反道徳、反芸術を標榜した。

問一 二重傍線部 a、e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 A、B に入る最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

A	ア 多読性	イ 独自性	ウ 模範性	エ 対照性	オ 異様性
B	ア 扉	イ 腰	ウ 弓	エ 手	オ 気

問三 傍線部①「訓読み」とあるが、次の動詞を読む際に、漢字を訓読みするものはどれか。ア～オの中からすべて選び、記号で答えよ。

ア 律する イ 教える ウ 転じる エ 消える オ 命じる

問四 傍線部②「日本語では、いわゆる「牛耕式」はおこなわれたことがない」のは、なぜだと筆者は考えているか。解答用紙の「ため」に続くように本文中から三十文字以内で抜き出し、最初と最後の五文字を答えよ。

問五 空欄 X、Y に入る最も適当な語句を、本文中から X は三文字、Y は二文字で抜き出して答えよ。

問六 空欄

i

v

 に入る最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（同じ記号は二度使えない）。

ア さて イ しかし ウ ちなみに エ すなわち オ だから

問七 傍線部③「真の縦書き」について、(1)、(2)の間に答えよ。

- (1) 図1・1と図1・6のうち、「真の縦書き」にあたるものはどれか。算用数字で答えよ。
- (2) 筆者は、「真の縦書き」には何が必要だと考えているか。本文中の言葉を用いて、二十字以内で説明せよ。

問八 傍線部④「縦書きと横書きの関係はロロ文字の場合などとはまったく別物である」とあるが、ロロ文字などと日本語はどのように異なるのか。両者を比較しながら、本文中の言葉を用いて六十字以内で説明せよ。

問九 この文章で筆者が述べていることに合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 日本語は、音韻や文法の構造のみならず文字・表記も他言語に比して特殊なものといえる。
- イ 日本語において牛耕式を縦書きでおこなうのは、浮遊感があってわれわれにはなじまない。
- ウ 日本語において限られた文体でおこなわれた牛耕式は、他言語での運用も知られている。
- エ モンゴル文字やロロ文字のように、複数の書字方向の方式が可能な文字は多く存在する。